

## 『太平御覧』「妖異部」をめぐる考察

三田 明弘

### Ⅰ「妖異部」に至るまでの『太平御覧』部立ての主題の変遷

『太平御覧』の部立てが、説話集のような連想的連続性を持っているのは、興味深い現象である。

たとえば第八三七巻から八四二巻までは「百穀部」だが、その前は第八〇二巻から八三六巻まで「珍宝部」「布帛部」「資産部」という産業・財産つながりの流れになっており、備蓄された穀物も確かに財産といえまごうことなき財産である。そして「百穀部」に続くのは第八四三巻から八六七巻の「飲食部」で、この両部の間には〈食物〉という共通項がある、というわけである。その次は第八六八巻から八七一巻の「火部」であり、「飲食部」とは〈調理〉というキーワードが共通する。

この様に連想で連続しながら、少しずつテーマがずれて移行してゆくわけだが、第八七二からの「休徴部」「咎徴部」「神鬼部」「妖異部」という流れは、それまでの資産から飲食へと移行してきたテーマとは、連続性よりも断絶性をより強く感じさせる。つまり、人為性と自然性の併存している「火部」を境に、人為的なものから自然現象へと主題が大きく変わっているのである。しかも通常の自然については、『太平御覧』は冒頭のあたりの巻においてすでに述べているので、ここでは、自然現象の中でも、その異常な発現である「休徴」「咎徴」「神鬼」「妖異」の部が配置されたのである。

「休徴部」は「禮曰國家將興必有禎祥」などの文言があり、各種の瑞祥を記している。そして「咎徴部」はこれと反対に、様々な凶兆を蒐集した巻である。

それぞれ、部立ての細目は次のようになっている。

#### 「休徴」

(休徴部一) 日、月、星、風、雨、雲、霧、露、雷、氣、光、人、神

(休徴部二) 地、山、湖、河、海、洛、水、醴泉、井、池、土、社、石、草、蕙、華、朱草、蓂莢、嘉穀、秬鬯、福草、福井、葳蕤、屈軼、延嘉、紫達、芝、蘭、茅、蒿、木、寶連潤達、平露。

#### 「咎徴」

(咎徴部一) 天、天裂、天開、天光、天崩、天鳴、四時

(咎徴部二) 五星、客星、孛、天狗、枉矢、蚩尤旗、獄漢、五殘、國皇、格澤、旬始、營頭、漢、蓬星

(咎徴部三) 風、暴風、黒風、赤風、雷、冬雷、霹靂、無雲而雷

(咎徴部四) 雲、五色雲、青雲、黄雲、赤雲、黒雲、氣、白氣、赤氣、黒氣、無雲而雨、雨土、雨沙、雨灰、雨血、雨肉、雨毛、雨水、雨花、雨草、雨穀、雨魚、雨蟲、雨錢、雨水銀、雨金、雨續、雨帛

(咎徴部五) 雪、不時雪、赤雪、霜、晝霜、雹、霧、黄霧、赤霧、黒霧、虹霓、白虹、紫蜺

(咎徴部六) 晝昏、陰、旱、寒、疫

(咎徴部七) 地震、地裂、地陷 地凶、土踊、地生毛

「休徴」「咎徴」とともに、天地の異変を主題としていることが看取されるであろう。文字通り天変地異というわけである。

その延長上に「神鬼部」が置かれている。冒頭に『易』曰「陰陽不測之謂神」とあって、陰と陽が千変万化するものを神としている。ここから敷衍して考察すれば、陰陽の異変の人格化として「神鬼」という存在が把握されていると考えられるであろう。

そして、神や鬼に続く、より非人格的な、或いはより原理的な陰陽の異変をまとめたのが、次の「妖異部」であると位置づけることが出来ると思われる。

## II 「妖異部」の分析

『太平御覧』妖異部は巻八百八十五より四巻が充てられており 怪、魂魄、精、重生、変化のカテゴリーに区分される。

### 1. 怪

巻八百八十五は「怪」の項目の巻になっている。その冒頭に引かれている『春秋潜潭巴』は、魏の宋均による『春秋』の緯書である。

『春秋潜潭巴』曰「異之為言恠也。謂先發感動也。」

「異の<sup>わざ</sup>為を、恠と言ふなり。先ず感動を發すを謂ふなり。」この文言を解釈すれば、「怪とは異常なる出来事であり、ある事の前兆として、感應により発動する現象である」ということになるのか。そして、この抽象的な説明に続いて、具体的な「怪」の事例が、まず『左傳』『國語』から『宋書』『唐明皇雜錄』等までの史書より引用されている。それらの共通点は、何らかの社会的・政治的事件が起きる予兆として、その事件に先立って超常現象が発生した事例が集められていることである。

一例を挙げると

『後漢書』曰「彭寵自立為燕王。多見變怪。堂上聞蝦蟇聲、在爐火下鑿地求之。不得。後為奴所殺。」

という具合である。

史書に続いて『世説新語』『列異伝』『搜神記』等の志怪小説類から、同様のコンセプトの説話が引用されており、巻末に引用されているのは、次の様な一文である。

賈誼「鵬鳥賦」曰「誼為長沙太傅。有鵬飛入誼舍、止于坐隅。鵬似鴉、不祥鳥也。」

怪異現象を日常から切り離された不条理な出来事と見るのではなく、人間の営みに対する天の警告として社会的に理解する姿勢が明確なのは、『太平御覧』が国家プロジェクトとして編纂されたものであり、国政への利益という視点から万物を解釈する必要があったこととも関係があろう。しかし、より重要なのは、中国に於いては、怪異現象に対するそ

のような理解の方法は、根底にあるのは天人相関思想であり、極めてオーソドックスなものであるということである。「怪」の部の引用書が前半が史書、後半が小説と、およそ二分することが出来るのも、中国文化における、志怪という文学形式の理念における「史」と「文」の不可分の関係を象徴しているといえよう。

## 2. 魂魄

「怪」を引き起こすのは、人の霊や、動物の精である。そこで「怪」に続いて巻八百八十六は「魂魄・精」の巻となっている。本文中では

『易上繫』曰「精氣為物。遊魂為變。」

という句が巻頭に引用されており、これが「魂魄」と「精」が同一巻に収められる理由の説明になっている。つまり精の凝った物が「物の怪」であり、遊離した魂魄が「幽魂」であり、それらが変事を為すという謂いであろう。

「魂魄」の項には、

『淮南子』曰「天氣為魂。地氣為魄。」

に代表される魂魄の本質を問う抽象的文言と、

『王子年拾遺記』曰「融臯山上有飜魂稻。言食者死更生。」

のような死者の再生に関する言説が、多く見られることが特徴である。他には『楚辞』の引用等が見られるが、実際に魂魄が何か具体的な怪事を起こす話は見られない。死者の霊による怪事は「鬼」話という形で、「神鬼部」において既に述べられているので、「妖異部」では魂魄の概念や、死者の再生が主に語られることになったのであると考えられる。

## 3. 精

「精」の項目のコンセプトは

『抱朴子』曰「萬物之老者、其精悉能假託形以惑人。唯不能於鏡中易形耳。是以古人入山道士、皆以明鏡懸於背後。則老魅不敢近人。」

に端的に示されている。様々な動植物が年月を経て、特殊な形態を獲得する現象を解説した文言が集められているのである。そのような変化を経て超常的能力を持つに至った存在が「精」である。

巻末には、やはり『抱朴子』から

又曰「山川石木井竈洿池猶有精氣、人身之中亦有魂魄。況天地為物、物之大者於理當有精神、有精神則宜賞善罰惡。但其體大網疎不必機發而應耳。」

という語が引かれ、自然界の万物が有する「精氣」と、人間の「魂魄」が、どちらも存在の中心にある「精神」として、同質のものと理解されている。

また「魂魄」の方では見られなかったが、「精」の話のなかには、次のような予兆的性質の説話も見られる。

雷次宗『豫章記』曰「永嘉末、有大蛇長十餘丈、斷道。經過者、蛇輒吸取。吞噬已數百。道士吳猛與弟子殺蛇。蛇死而蜀賊杜弼滅。」

#### 4. 重生

これに続く巻八百八十七は「重生」「変化」の巻である。

「重生」は、一旦死んだ人間の再生譚を扱っているが、この現象が一つの項目として立項されているのは、前巻において立項された「魂魄」の主題との関わりからである。そして、さらに重要な理由は、人間の再生という現象もまた陰陽の転倒現象であり、またそれが世の中の変動の予兆でもあるからである。そのことを端的に示すのが次の説話である。

『續漢書』曰「獻帝初平中、長沙人姓桓死。月餘其母聞棺、中有聲、發之遂生。至陰為陽、下人為上。其後、曹公由庶士起。」

この説話では、長沙の男の再生は陰が極まって陽になることを象徴しており、それは下克上の予兆であり、具体的には曹操の勃興を指していたのだと説明されている。

#### 5. 変化

次の「変化」は、収録事例数が多く、巻八百八十七の後半から巻八百八十八にかけての一巻半が、この項目に充てられている。

『禮記』月令曰「仲春鷹化為鳩、季春田鼠化為鴽、季夏腐草為螢、季秋雀入大水為蛤、孟冬雉入大水為蜃。」

という文言に見られるように、ここでは生物が他の生物などに変化する現象を扱っている。つまり、この項目の主題である「変化」は、前巻の「精」の項目において扱った現象と類似性を持っている。しかし、「精」が年を経た生物の靈的变化を扱っていたのに対し、「変化」は突然変異や季節的な変化なども含んでおり、より広範囲の変異現象を包括していると言える。

この項にも、変化の事象を論じるとともに、それが社会的な事件の前兆であったという文脈になっている予兆性の説話があるのは、他の項目と同様である。例えば、『異苑』から、次の説話が引用されている。

又曰「元興二年、衡陽雌雞化為雄、八十日冠萎。後桓元篡八旬而敗。」

一方、特筆すべきは人間が他のに変化する事例が多く見られることである。例えば『莊子』からは次のような引用が見られる。

萇宏死于蜀。藏其血三年而化為碧

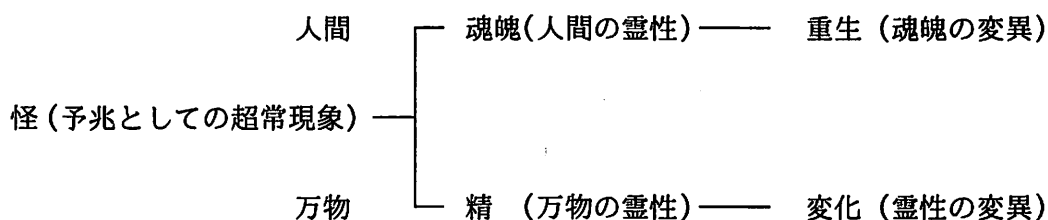
これは心正しい人間の血が碧玉になるという話だが、人間が虎に変化して他の人間に害をなすという事例が数多く収録されているという特徴にも注目したい。以下に一例を挙げる。

『齊諧記』曰「義熙四年、東陽郡太末縣吳道宗少失父、單與母居。会道宗收債不在、隣人聞其屋中碎礮之聲。闚不見其母、但有烏斑虎在其室中。鄉曲驚怕、恐虎入食其母、便鳴鼓会人共往救之。圍宅突進、不見其虎、但見其母、語如常、不解此意。兒還、母語之曰「宿罪見譴、當有變化。」事後一月日、便失其母。縣界内虎災屢起。皆云烏斑虎。百姓患之、發人格擊之。殺數人後、人射虎、中膺并戟刺中其腹、然不能即得。經數日後、虎還其家故床上、不能復人形、伏床上而死。其兒號泣而葬其母如法、朝夕哭臨。」

### Ⅲ妖異部の構成と特色

以上の分析から、『太平御覧』妖異部を形成する五つの項目、怪・魂魄・精・重生・変化の相互の関係は次のように説明することが出よう。

まず、妖異現象の予兆的性格を強調する「怪」の項目は、概論的に妖異現象の本質を示している。そして、「魂魄」「精」は、時に妖異現象を引き起こす原因となる人間と万物の本質である靈性についての解説であり、「重生」「変化」は、妖異現象の中でも靈性に生じる種種の変異に関する事例を集めた特化項目なのである。



『太平御覧』「妖異部」で興味深いのは、政治的・社会的意義のある天の警告として妖異現象を述べるという方針を一貫して堅持しつつも、項目と事例の配置に、人間の本質への興味の強さが傾向として見られる点であろう。「変化」の末尾に、人間の虎への変身と変身後の殺人を、複数の事例によって詳しく紹介しているのは、その意味で極めて象徴的である。「変化」という主題を、予兆的側面からだけではなく、人間の中に潜む業と関わらせて考察しようとする方向性が窺われるのである。

ちなみに『太平御覧』に先行する類書である『藝文類聚』には「妖異」という項目はない。『藝文類聚』では 第七十八巻「靈異部上 仙道」、第七十九巻「靈異部下 神・夢・魂魄」という具合に、「魂魄」は「妖異」ではなく「靈異」として論じられている。そ

して、末尾の三巻が、それぞれ第九十八巻「祥瑞部上」、第九十九巻「祥瑞部下」、第一百巻「災異部」となっており、『藝文類聚』もやはり、瑞祥や凶兆を、編纂上重視していたことが窺われる。と、同時に「妖異部」の構成が、『太平御覧』の独自色の強いものであることも、『藝文類聚』との比較から理解されるのである。

日本の説話文学作品では、『太平御覧』と妖異に対する考え方が近いと思われるのが、『古今著聞集』である。『古今著聞集』巻第十七は「怪異第二十六」「変化第二十七」の二篇より成るが、「怪異第二十六」の説話は、凶事の予兆的性格の話が多い。そして、この篇の序文は次のように書かれている。

怪異のおそれ、古今つつしみとす。しかあれども、かの「白氏文集」の凶宅の詩にいへるがごとく、「人凶なり、宅凶に非ず」。もろもろの怪異もさこそ侍らめ。なずらへて知るべき事にや。

怪異現象をおそれ慎むものとする伝統的観念を踏まえた上で、「怪異」の根本にあるのは結局は人間であるという視点は、先に述べた『太平御覧』「妖異部」の編纂方向に通じるものがあると思われるのである。

#### IV付説 『法苑珠林』巻三十一「妖怪編第二十四」の妖異観念

参考として、中国仏教類書の最高峰『法苑珠林』に見られる妖異観念についても、いささか検討したい。

以下に、『法苑珠林』「妖怪編」の説話の配列構造を分析し、その内包する主題を解き明かしてゆく。

『法苑珠林』巻三十一「妖怪編第四十二」は、「述意部」「引証部」「感応縁」によって構成されている。まず冒頭の「述意部」において、本編の主題である「妖怪」についての概念規定が次のようになされている。

妖怪者干寶記云蓋是精氣之依物者也。氣亂於中物變於外形神氣質表裏之用也。本於五行通於五事。雖消息昇降化動萬端、然其休咎之徵皆可得域而論矣。此是俗情之近見、未達大聖之因果。考斯微變乃是衆生宿業之禰因、感現報之縁發。因縁相會物理必然。故有斯徵、未足可怪也。

内部の気の乱れが、物の外形の異形化をもたらすという五行説による妖怪に対する解釈を不十分な理解であるとし（「此是俗情之近見」）、因果説に基づく解釈（考斯微變乃是衆生宿業之禰因、感現報之縁發）を提示した上で、所謂「妖怪」も、畢竟、物の理になつた現象の一つに過ぎず、怪しむべき事ではないのだという結論に至る（因縁相會物理必然。故有斯徵、未足可怪也）。

中国の伝統的思考法である五行思想の解釈を示した上で、それよりもさらに本質的な解釈として仏教思想の特徴である因果説の解釈を掲げており、伝統思想に対する仏教思想の優位性を強調する構成になっているわけである。この構造が「妖怪編第四十二」全体のコンセプトと密接に関係すると思われるのは、「述意部」に続く「引証部」と「感応縁」のコントラストによって説明される。

「引証部」は「述意部」において述べた概念について仏典を引用して証左とする部分であり、「妖怪編第四十二」においても『仏本行經』、『旧雜比喩經』、『菩薩所胎經』の説話が証明として引用されている。『仏本行經』の羅刹国の故事つまり「僧迦羅譚」と、『旧雜比喩經』の五道人の故事、『菩薩所胎經』の三頭児の故事などがそれにあたる。これらの説話が「妖怪」という一つのカテゴリーに分類されるのは、いずれもが「人間以外の存在が仮に人間に変化する」というモチーフを共有していることに依る。これらは仏典よりの引用であるので、いずれも漢訳された仏教説話ということになる。

一方「感應縁」は、仏典ではなく、中国の史書・小説類の中より抜粋された説話によって構成されているのが特色である。つまり、同じ「妖怪」という概念を巡っての引用ではあるが、「引証部」ではインド説話あるいは純粋な仏教説話によって「妖怪」が説明され、そして「感應縁」では中国説話（本来は非仏教的脈絡において語られていた説話を含めて）によって「妖怪」が示される。そこに自ずからインドと中国の説話の構造上の相違から、説話によって示される「妖怪」概念に差異が生じる。『法苑珠林』のスタンスとしては、仏教思想の中国伝統思想に対する優位性が存在するので、「感應縁」の中国説話は、仏教的な文脈による説話の再解釈を強いられるわけである。

以下に感應縁に引用される説話二十七種と、その内包する意味についての一覧を提示する。

## 感應縁 略引二十七驗

搜神記より引用せし十八条

- |              |              |
|--------------|--------------|
| 1 東陽留寵為血怪    | 不吉な予兆(戦死)    |
| 2 魯昭公時龍怪     | 不吉な予兆(民心動揺)  |
| 3 漢惠帝時龍怪     | 不吉な表象(有徳者迫害) |
| 4 漢武帝時蛇怪     | 不吉な予兆(皇子謀反)  |
| 5 漢桓帝時蛇怪     | 不吉な予兆(戦乱)    |
| 6 晉太康中有魚怪    | 不吉な予兆(宮中騒動)  |
| 7 漢成帝時鼠怪     | 不吉な予兆(賤人出世)  |
| 8 漢景帝時犬怪     | 不吉な予兆(地方王謀反) |
| 9 漢章帝時魅怪     | 鬼を制す         |
| 10 賈誼見鵬鳥怪    | 予兆により達観す     |
| 11 安陽城有亭廟怪   | 怪に動じず妖を制す    |
| 12 東越閩中蛇怪    | 少女、妖蛇を斬る     |
| 13 中山王周南有鼠怪  | 怪に動じず妖を制す    |
| 14 桂陽張遼樹怪    | 怪に動じず妖を制す    |
| 15 南陽宋大賢亭怪   | 怪に動じず妖を制す    |
| 16 吳時廬陵郡亭中有怪 | 怪に動じず妖を制す    |
| 17 建安中東郡界老公怪 | 妖人を制す        |
| 18 晉時有老狸作父怪  | 妖狸に動転し親を殺す   |

南京寺記より引用せし一条

19晉南京寺記鳥巢殿怪 尼僧の勧めにより皇帝徳を修め怪を断つ

幽明録より引用せし三条

20晉時有狸作人婦怪 妖狸の奸計を暴き退治する

21晉時有狸作人女産兒怪 狸との通婚、偶然により真相を知る 聊斎志異の原型

22晉時張春女邪魅怪 花嫁、邪魅に憑かれる

異苑より引用せし二条

23宋時梁道脩宅内鬼魅怪 外国道人の呪力で鬼を払う

24瑯琊王聘之妻 王の妻、死後に葬の薄きを怒る(真に妻たるや否やを疑うものか)

番外 国語・史記による山鬼に関する考察 山鬼は一年のことを知るに過ぎず

神異経より引用せし一条

25西方山中人食蝦蟹怪 山獐は人のようであるが鬼魅である

述異記より引用せし一条

26宋時王家作蟹斷有材怪 山獐に感わされず退治した

冥報拾遺より引用せし一条

27唐時逆人張亮霹靂怪 前話において妖怪が木材に化けたことの連想から、落雷を妖怪の仕業と見たか(標題もその謂いの如し)、後半の予兆譚は他の予兆譚と根本的に性質が違う

この一覧によって明らかなように、『法苑珠林』の説話配列には、妖怪を何かの予兆と見る説話群から、人に害をなす妖怪の克服の説話群へというテーマの移行を看取することが出来る。つまり『法苑珠林』感応部における説話はただ単に類似した話題のものが羅列されているのではなく、前後の説話の主題が連続して、より大きな主題を構成するという関係性を有しているのである。

この「感応縁」を「引証部」と比較すると、「引証部」の説話はもともと仏典の説話であったので、各説話の主題がストレートに仏教の称揚につながっている。

例えば、『仏本行経』の羅刹国の故事は、その末尾は以下のようになっている。

「頌曰求寶失舟濟、飄浮思救形、幻媚多方趣、妖魅誑人情、假接度海難、虚發親愛聲、自非馬王負、危苦詎安寧」

それに対して、「感応縁」は本来は仏教とは別の文脈で語られていた説話が大部分なので、専ら妖怪の予兆性に対する盲目的な信仰の誤りを暴くという、伝統思想に対する批判性に主題の比重が置かれている。

つまり、インド説話によって仏教を讃える「引証部」と、中国説話が伝統思想を否定するための材料として利用される「感応縁」との相互補完性あるいは対立性が、『法苑珠林』という作品の場合は、内在しているのである。